HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	朝鮮体育協会と峰岸昌太郎
Author(s)	西尾, 達雄
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 110, 85-103
Issue Date	2010-06-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.110.85
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43270
Type	departmental bulletin paper
File Information	05-Nishio.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院
紀要　第110号　2010年6月

朝鮮体育協会と峰岸昌太郎

西　尾　達　雄*

Chosen Sports Association and Shotaro Minegishi

Tatsuo NISHIO

【要旨】朝鮮人マラソンオリンピック選手を育て学生たちに慕われ尊敬された峰岸昌太郎は1931年5月8日養正高等普通学校を突如退職することになる。退職後峰岸は，朝鮮体育協会という日本人体育団体で陸上競技部監督として指導する。同年9月には同協会主事に選任される。そして，約1年3ヶ月という短期間で再び「主事解職」という事態に遭遇することになる。本稿では，朝鮮体協主事選任の経緯とその後の峰岸の朝鮮人選手に対する指導状況を確認しながら，朝鮮体協時代における峰岸の活動の特徴を明らかにする。また，突然の「解職」にいたる経緯及びその背景について検討する。その際に，朝鮮体協の組織体質と総督府との関わりに言及し，同協会が抱えていた課題を明らかにする。最後に，まとめとして養正高普教師時代から体育協会主事までの朝鮮における峰岸昌太郎の思想と行動について簡単な整理を試みる。
【キーワード】峰岸昌太郎，朝鮮体育協会，総督府，赤字体質，組織改編

はじめに

筆者は，先に養正高等普通学校（以下「養正高普」と略）体育教師峰岸昌太郎の教育活動の特徴と同校をおよそ10年間で突然退職することになった背景を検討している。[1)] 峰岸は，1921年4月に養正高普に赴任し，赴任直後から体育授業のみならず，課外活動にも力を入れ，多くの運動部を組織しその活動の基礎を築いている。特に彼は，スポーツの基本として陸上競技に力を入れ，同校陸上競技部を全日本の強豪中等学校が集まる駅伝競技会である「阪神駅伝3年連続優勝」（写真）という偉業に導き，日本においても同校を「陸上王国」と呼ばれるまでに指導尽力した人物であった。しかもその指導においてのみならず，生活においても朝鮮人を差別せず，朝鮮人に慕われるものであった。しかし，その輝かしい活動は，1931年5月8日に「突然の辞職」によって終わる。学期途中での退職であった。退職の理由は「一身上の都合」以外に明白なものはなかった。

しかし，1931年1月に阪神駅伝3年連続優勝を達成し，偉業に対する称賛と感謝が示されている同じ年の5月になぜ突然退職したのかという疑問が残る。これについては，「阪神駅伝三連覇を置き土産に」したという見方もある。[2)] しかし，峰岸は同校退職1ヶ月後，京城府（現ソウル市）内にある朝鮮体育協会（以下「朝鮮体協」と略）陸上部監督として指導に当たっていたことが新聞紙上で確認できる。[3)] 39才といえば，教師として働き盛りで

* 北海道大学大学院教育学研究院健康スポーツ教育論講座　体育史研究グループ

ある。体協陸上部監督ができて養正高普にいられない事情とは何であったのかやはり不可解である。なぜ朝鮮人の高普を辞めて，日本人の団体である朝鮮体協陸上部監督であったのかということである。しかし，これらについては資料収集を試みたが，未だ解明できておらず，今後も解明すべき課題として残されている。





（左）1929年１月史上最初の朝鮮代表として日本で挙行された大阪神戸間駅伝競走大会に初出場し栄誉の優勝を果たした養正の健児たち。中央が峯岸昌太郎。
（右）1930年１月再び日本に遠征して優勝した選手たち。左端が峯岸昌太郎，右から2番目が金恩培。
（写真は，『養正体育史』より）[4)]

峰岸は，高普退職の４ヶ月後，1931 年９月に朝鮮体協主事に選任されている。そして，約１年３ヶ月という短期間で再び「主事解職」という事態に遭遇することになる。

本稿の課題は，一つには，朝鮮体協主事選任の経緯とその後の峰岸の朝鮮人選手に対する指導状況を確認しながら，朝鮮体協時代における峰岸の活動の特徴を明らかにすることである。もう一つは，突然の「解職」にいたる経緯及びその背景について検討し，峰岸にとって朝鮮体協とは何であったのかを考察することである。そして最後に，養正高普教師時代から体育協会主事までの朝鮮における峰岸昌太郎の思想と行動について簡単な整理を試みたい。

ところで，これまで峰岸昌太郎の生年月日および生誕地等は不明であったが，今回新たに判明した事柄があるので，最初に紹介しておきたい。[5)]

峰岸昌太郎は，1891（明治 24）年 11 月８日，埼玉県児玉郡にて，父須藤重太郎，母之知の次男として生まれた。1914（大正３）年４月 27 日，22 歳の時に同郡の峰岸好戸籍に入夫している。好との間には二男一女をもうけるが，女児は 1920（大正９）年２月２日に１歳で亡くなっており，ほぼ１ヶ月後の３月 21 日に妻好も 27 歳で急逝している。当時峰岸家は鹿児島にいたが，次男はこの母の死を機に父母のふるさと埼玉県児玉郡の実家に預けられたという。次男はその後，峰岸が朝鮮に赴任したのに伴い，しばらく京城（現ソウル）で暮ら

したという。この時に孫基禎氏が昌太郎の指導を受けていたことと関わって互いに知りあったという。次男は，1985 年 4 月に東京の自宅を尋ねてきた孫基禎氏とともに自宅で写真を撮っており，孫基禎氏と交流を持っていたことが確認できる。

峰岸は，1917 年 25 歳の時に日本体操学校を卒業しているが，その年に鹿児島姶良郡立国分実科高等女学校（現国分高等学校）に夫婦ともに教師として赴任している。[6] ここで 1921 年 3 月まで務めたと思われる。そして同 21 年 4 月 20 日 29 歳の時に養正高普に赴任している。この間，妻好の他界，子どもとの別居を経て，一時子どもと同居するなど，私生活では困難な状況であったことが窺える。その後年月日は不明であるが，再婚し，一男二女をもうけたという。しかし，その所在は確認できていない。後述の朝鮮体協時代の妻は後妻きみである。

峰岸は，朝鮮体協解職後，後に見るように満州に渡ったといわれている。そして戦後は日本に戻り，1949（昭和 24）年 8 月 21 日，愛媛県周桑郡にて 57 歳で亡くなっている。

1. 朝鮮近代スポーツ史における峰岸の活動の意義

峰岸昌太郎が養正高普教師時代及び朝鮮体育協会主事時代に朝鮮人スポーツ選手を指導した意義について考える時，当時の朝鮮人にとってスポーツとは何であったのかを見ておく必要があるであろう。ここでは，朝鮮近代スポーツ史の発展過程を概略しながら述べてみたい。

朝鮮におけるスポーツ活動は，1880 年代に設立された私立学校の課外活動や 1896 年設立の独立協会のスポーツ教育論，そして 1905 年頃から 1910 年の日韓併合までに起こった愛国啓蒙運動の影響を受けながら結成されたスポーツ団体の活動にその主体的な系譜をたどることができる。とりわけ 1906 年に創設された大韓体育倶楽部などのスポーツ団体の活動は，植民地化の危機のなかで民族主義的運動として展開するようになり，「独立の基礎としての身体と精神の訓練」が実施された。しかしこれらの団体は，併合とともに解散させられる。

スポーツ団体は解散させられたとはいえ，併合後もスポーツ活動の流れは途絶えず，学校やキリスト教青年会などを中心に野球や庭球など，種目ごとのチームを作り，日本人との対抗試合などが行われるようになっていく。しかしその中で，朝鮮人の実力が高まり，日本人との対戦で民族意識を刺激する様相を呈するようになると，その対抗試合を禁止したり，[7] 朝鮮人の優秀選手は試合に出場させなかったりした。[8] こうして 1910 年代のスポーツ活動は，日本人を中心として野球，庭球などが実施され，朝鮮人は一部の限られた学生たちによって推進されたという。[9]

しかし，朝鮮人たちに根づいていたスポーツの要求は次第に表に現れるようになり，併合前のスポーツ団体関係者や留学生たちによって朝鮮人のスポーツ統括団体を求める気運が高まっていた。ちょうどその頃，ソウルに住む日本人スポーツ関係者が「**朝鮮体育協会**」を組織した。1919 年 2 月のことであった。これに刺激を受けて朝鮮人のスポーツ団体結成の動きが具体化することになる。ところが，その直後に三・一運動が起こり，団体結成は一時中断せざるを得なくなる。三・一運動からおよそ 1 年後，教育や文化面での総督府の「方針転換」の中で，朝鮮人のスポーツ団体結成の動きが再び活発化し，1920 年 7 月 13 日「**朝鮮体育会**」が創設された。朝鮮には日本人による「**体育協会**」と朝鮮人による「**体育会**」という二つの団体が生まれたのである。

朝鮮体育会は，世界的な民主主義と民族自決主義の発展の中で，朝鮮人の「団結と民族発展の根本問題である強力な体力」を養成する「国民的な体育運動の振興」をめざすものであった。また同時に同会は，平和とスポーツ普及を目的とした民族の祭典オリンピックに学んで，スポーツマンの育成をめざすものでもあった。創立発起人には，スポーツ関係者の他に「学校長及び学校を代表する者，地域の名士で親日的色彩がない者」[10] などが選ばれたという。

朝鮮体育会の活動は，1920 年 11 月の第 1 回全朝鮮野球大会主催を始めとして，翌年 2 月の第 1 回全朝鮮蹴球大会等の開催など，多様なスポーツ活動を開催していく。1929 年には，従来個別に行ってきた野球，庭球，陸上競技の大会が創立十周年を記念して全朝鮮競技大会として挙行されるようになる。

一方，三・一運動後の方針転換によって内鮮融和政策がとられるようになり，これまで禁止されていた日本人の競技会に朝鮮人が参加できるようになる。[11] それは，地域や学校の運動会から日本人体育団体主催の全朝鮮レベルの競技会，さらには日本で開催される大会にいたるものである。朝鮮で開催される大会では，1920 年朝鮮体育協会主催第 1 回陸上競技大会にはじまるものであり，日本での大会では，翌 21 年の甲子園での全国中等学校野球大会などが象徴的なものである。[12]

このような変化は，朝鮮におけるスポーツ発展の大きな刺激になったのみならず，特に，朝鮮人選手にとっては，日本人と「対等」の関係で闘うチャンスであり，いやが上にも民族意識を刺激するものであった。スポーツで支配民族日本人と「対等」に闘うという点で，最も強烈なエピソードを残したのがボクシングであった。当時朝鮮ボクシング選手の間で公然と語られていたのは，「日本人相手には判定では勝てない，捨て身でやるしかない」ということであった。後に，総督府はこうしたことを問題にし，スポーツ奨励の中でボクシングだけは，朝鮮で行う日朝間の試合は認めないと一時中止したという。[13]

このような傾向は，多くのスポーツに共通していた。明治大学スケート部にいた金正淵は，「自分がスケートに勝つことは，日本への抵抗だと意識したこともあった。スケートは武器なき闘いとまで意識したこともある。」[14] と述べている。また，陸上競技でも球技でも審判が日本人ばかりで公正さに欠けるが，陸上競技は勝敗がはっきりしている。それだけに陸上競技の実力向上は，民族の培養と発揚に打ってつけであると考えられたという。[15]

こうした民族意識の表出は，国外でも試みられた。1921 年には，朝鮮体育会理事会で 5 月に開催される第 5 回上海極東大会に視察団派遣を協議し，上海の朝鮮人体育会が朝鮮人選手の正式参加を提議した。しかしその要求は受け入れられず，彼らは仕方なく番外競技に「三角山」のマークをつけて参加したという。[16] また，1925 年のマニラでの第 7 回極東大会にはじめて上海留学生選手が参加した。しかし，万国旗の中に母国の旗がないのを知り，祖国なき民族の悲哀を知ったという。[17]

当時の多くの朝鮮人は，極めて劣悪な栄養状態と身体的精神的不自由の中にあり，国の内外で被支配民族の悲哀を受けていた。1927 年 5 月の朝鮮日報は，そうした状況の中でも「体育の為の凡ゆる運動競技に於いて朝鮮人たるものは劣敗の域を脱して勝利を確保するに至るとすれば全朝鮮人の前途のため祝福すべきことである」と報じ，[18] スポーツ活動を盛んにすることが民族的な誇りになるとし，その活動を支える主張を行っていた。こうしてサッカーでは日本人を凌ぐ実力をつけ，他のスポーツにおいても国際大会に出場できる状況になっていた。

以上のような歴史的過程を見ると，朝鮮人にとってスポーツとは，何よりもまず民族主義的性格をもつものであったことがわかる。それは個々人によってその強弱はあるにせよ,「反日運動」であったり「武器なき戦い」であったりした。そして，その勝利は「全朝鮮人の前途のため祝福すべきこと」でもあった。

すでに前稿で指摘していることであるが，朝鮮人選手を指導する峰岸に日本の協会関係者が「貴方はいったいどこの国の人なのか」と詰問したのに対して，彼は,「競技は正々堂々と闘うものではないか」と言ったという。ここには，スポーツに日本人も朝鮮人もない，という彼の認識が示されているといえよう。峰岸は，このような朝鮮人のスポーツ活動の中に入っていったのである。しかもその中で彼は，養正高普を阪神駅伝三連覇という偉業に導き，金恩培をオリンピックマラソン 6 位入賞に導いたのである。このような陸上競技における業績は，養正高普やマラソンランナーだけではなく，朝鮮人のスポーツ全体に大きな刺激となったといえる。ここに朝鮮スポーツ史上における峰岸の活動の意義があるといえよう。

しかしすでに見たように，峰岸は突如養正高普を離れることになる。そして朝鮮体協の主事に選任される。そこで峰岸はどのような活動をしたのか，次に見ることにしたい。

2．体協主事就任とその活動

峰岸が，朝鮮体協主事に選任されるのは，1931 年 9 月 7 日で養正高普辞職 4 ヶ月後のことであった。峰岸が 40 歳になるほぼ 2 ヶ月前のことである。その経緯について京城日報は,「マラソンの峰岸氏が主事に　諸岡氏の後をついで體協を引き受ける」という見出しで，次のように伝えている。

> 全朝鮮スポーツ界の世話役として永らくお馴染みの深かった諸岡源吉氏が辞任してその後に峰岸昌太郎氏が朝鮮体育協会主事に推されたが，同氏は諸岡氏と同様古くから朝鮮スポーツ界に深い関係のあった人で殊に養正高普がマラソン王国として内地までもその聲名を轟かしてゐるのは全く峰岸氏努力のたまものであるといはれてゐる。なほ同氏は就任挨拶のため七日本社来訪，左の如く語る。
>
> 「永らくこの仕事をされてゐた諸岡氏の後を受けまして果して大過なくやって行けるか心細いものがありますが，兎に角全力を尽くして努める考へで居ります。まだ就任早々で将来のことなどまだ計画してゐませんが，この秋の朝鮮神宮の各大会は協会にとっても頗る大きな仕事でありますのでひたすら皆様のご後援を願ってゐます」。[19)]

この記事から 5 月 8 日に養正高普辞職以後，9 月 7 日には正式に再就職したと考えられる。

就任の挨拶では,「全力を尽くして努める」という決意と「将来」への希望が示されており，新たな仕事への期待が感じられる。

主事になって以後の詳細な活動内容は不明であるが，後に見るように，赤字体質の協会を何とか立ち直らせる努力をしていたようである。しかしその中でも，1932 年のロサンゼルスオリンピック大会に向けての愛弟子たちを指導する活動においては充実した内容を窺うことができる。まず，同年 6 月頃の状況を京城日報は,「オリンピック　優勝せよ！　マラソン金，權両君の門出　讃ふべき背後の力　峯岸昌太郎氏」という見出しで，次のように伝えている。

◇ 全世界の韋駄天を向ふに廻して優勝の望み多いオリムピック・マラソンにわが国を代表していく朝鮮出身の選手權泰夏，金恩培の両君は本二日夜帰城し旅装をととのえて晴れの鹿島立ちをすることになってゐるが，この全日本予選で一，二着を占めた二選手についてはしなくも美しいエピソードが綴られてゐる。

◇ 金恩培君は養正高普の五年生で近来内地にまで数度遠征して必ず優勝の栄冠をおみやげに持ってくる長距離王国養正のナンバーワンであるが，金君らがこの燦然と輝く王国を築き上げるまでには蔭に立ち縁の下の力持ちとなって世話をやった人があったのだ。

◇ それは今朝鮮體協の主事の職にある峰岸昌太郎氏で，同氏が養正高普の先生をしてゐる時分，みづから手を取って雨の日も風の日も倦まずたゆまずコーチしてその心労酬ひられてコーチしてより数年目にこの実がなった譯で，金君は実に峰岸氏の秘蔵っ子であったのだ。

◇ しかも峰岸氏は先般京城で全朝鮮のオリムピック第一次予選が開かれるや特に金，權両君を運動場近くに合宿させ日頃の蘊蓄を傾けて二人の練習を指導し，丁度名工が最後の磨きに懸命な手を入れるやうに子飼ひの金君とその先輩の權君の世話をしたのであった。

◇ 今や峰岸氏の功は酬ひられて二人とも日本の名においてオリムピヤードに行く選手となった。日章旗をロスアンゼルスの空高く翻へし君ヶ代の国歌がなかでなされる下に我朝鮮の選手が栄冠を握り立つ姿は決して空想ではない……われらはその時の峰岸氏の気持，心持を知りたいのである。[20]（下線，引用者）

この記事では，峰岸のこれまでの活動を高く評価している。先の主事就任の記事では，養正高普での活動を伝え聞く程度の内容だったが，ここでは，オリンピック選手を輩出した指導者として大きく取り上げている。しかも，体協主事をしながら金恩培，權泰夏両選手を合宿指導していることを，むしろ称賛する内容になっている。ここからは峰岸が朝鮮人選手を指導することの問題性は見出すことができないし，体協での主事活動の困難さを示す事実は窺うことができない。もっとも，言うまでもないことではあるが，この記事は，朝鮮人選手がオリンピック代表として輩出されたことを讃えているのではなく，朝鮮人選手が「日本の名においてオリンピックに行くこと」を讃えているのであって，峰岸がそれに大きく貢献していることを評価しているものである。当時の内鮮融和を象徴する言説の一つであるといえる。それゆえに，その結果が期待どおりでなければ，批判は大きくなる。

同年８月，ロサンゼルスオリンピックマラソン大会の結果が報じられた。金恩培選手は６位に入賞している。この結果に対する二つの新聞の報道は対照的であった。一つは東亜日報であり，もう一つは京城日報である。

まず東亜日報の記事を見てみよう。その見出しは，「朝鮮運動史上で特書すべき栄誉　順位で計ることができないもの　恩師峯岸氏感想」となっている。その訳文は以下の通りである。

> 金恩培君を育てた，その後に隠れた偉大な指導者，今は朝鮮体育協会主事峯岸昌太郎氏は語る。
>
> 今は死んでも構わないほどただひたすら嬉しい。こういう選手を朝鮮で朝鮮人によって育てるようになったことは，朝鮮体育界のために，また将来のために大きいセンセイションを起こした点で金君の活躍は実に感激するのみであります。国で十八ヶ国，負けじ魂の強い二十八名の老將宿將たちに加わり，生まれて初めての道，初めての国際舞台で堂々と争って国の数で十五国の二十二選手を自分の下に引き離したことだけで私は優勝に劣らないうれしさで心が躍ります。・・・・・・　云云[21]

このように東亜日報では，６位入賞を讃えると同時に，峰岸の感想を載せ，朝鮮体育界に

とってこの結果が持つ意味を捉えようとしているのである。

次に，京城日報である。京城日報は，6月2日付の先に紹介した記事の前に，1932年5月末に「半島から檜舞台に始めて出場の二選手　オリムピックに選ばれて栄冠を期待される權，金両君」[22]という記事を掲載し，その期待の大きさを示していた。6月の記事もその流れのものであった。その期待の裏返しであったのであろうか，マラソン競技終了後の8月上旬の記事では「劈頭の百米に優勝　輝く我が水泳王国　宮崎，河石が一，二等を占む」のに対して「マラソン期待外れ　津田五着，金は六着，ザバラ新記録を作って優勝　權君は九着」として，水泳の活躍に対してマラソンを期待はずれであったと報じている。[23]

とはいえ，同じ紙面に「半島代表金君の奮闘」という見出しで「一躍にして世界選手」という記事や「よく闘ってくれた」という「金君の父君感激」の記事もあり，「近隣人の昂奮と感激で沸き返るやうな雑踏ぶり」をつたえている。[24]

また，同年9月のオリンピック終了後の金恩培選手帰国を報じた京城日報の記事では，「金恩培選手帰る 凱旋列車の賑ひ 今夕（14日）七時京城駅着」と報じ，[25]同日付朝刊では，「スポーツの使節　偉功を樹てた金恩培君は帰る」と報じており，[26]6位入賞を「偉功」として称えている。

しかし，これら京城日報の記事には，東亜日報のような峰岸の感想は含まれてはいなかったし，偉大な指導者へのねぎらいも見られない。

このように二つの新聞紙上における峰岸に対する扱いは異なっている。それは，民族誌と総督府の機関誌的新聞との違いを示すものと考えられる。すなわち，前者は，峰岸を民族の代表を育ててくれた恩人としてみているのに対して，後者は，内鮮融和を象徴する日本の代表としての朝鮮人選手を指導した人物としてみていると言うことである。

いずれにせよ，オリンピック選手の指導を中心とする活動状況からは，少なくともこの年の6月から9月頃において，峰岸周辺に3ヶ月後に起こる体協主事解職という事態に追い込まれる様子は窺うことはできない。しかし，この時期からすでに事態が動いており，峰岸を追い込む状況へと進展していたのである。では，体協はどのような課題を抱え，改革に直面していたのであろうか。それと峰岸解職との関係はあるのか，以下で言及したい。

3．体協改革問題と体協主事解職

3－1．朝鮮体協の特徴と体協改革の課題

朝鮮体協の設立過程の詳細については，すでに拙著[27]で紹介しているので，ここではこの団体の特徴について簡単に示しておきたい。

朝鮮体協は，1919年2月18日に朝鮮新聞社が中心になり，京城庭球団と京城野球協会に呼びかけて結成されている。その目的は，会則に「朝鮮に於ける体育を奨励し兼ねて会員の親睦を図る」こととあり，朝鮮における日本人のスポーツ奨励と会員の親睦を図ることであった。[28]当時，日本人の間では，野球や庭球が盛んになり，対抗試合や競技会をより合理的に経済的に運営するとともにその仲間を増やしていくという要求が高まっていた。朝鮮体協の設立は，文字通り「親睦団体」として結成されたものであり，そこに何らの政治的・政策的意図は示されていなかった。それは組織構成にも示されている。その構成は以下のようなものである。

会長は朝鮮銀行総裁美濃部俊吉，副会長は三井物産支店長高野省三で，評議員には安藤又三郎京城鉄道局長，櫻井小一朝鮮殖産銀行理事などが名を連ねている。理事には，井上致也龍山鉄道倶楽部野球部総取締役，木場貞一郎朝鮮銀行司事（同銀行庭球部会員）などで，幹事には，庭球関係者として第一銀行京城支店庭球部員井田善七，京城老童庭球倶楽部員大島満一（朝鮮総督府技師）などであった。また名誉顧問には，安部磯雄，総督府学務局長関屋貞三郎，大垣丈夫，漢城銀行専務取締役兼朝鮮生命保険株式会社副社長韓相龍などが入っていた。[29)]

このように組織の中には，名誉顧問として総督府学務局長が入っている程度で，民間企業幹部が主体となったものであった。これらの役員は，当時のスポーツを支える階層を示しているが，その名誉的な役割によって朝鮮体協を権威づけ，資金面での後援を期待されたと考えられる。むしろ会の実質的運営は，副会長の高野省三と理事以下の役職についた，庭球や野球を主体的に担ってきた関係者が果たしていることが窺える。ここに朝鮮体協の第一の特徴である自立的な組織としての「経営管理責任」の不明確さが生まれている。それは，自立的な組織としての会の財源のあり方とも関係してくる。

会の財源は，当初の会則に「寄付金」によると規定されていた。[30)] これでは会の運営が景気に左右され，資金面でのトラブルによって会存立の危機をもたらす問題が起きていた。そこで，1925 年 3 月の会則改正で会の財源は「会員の会費」によるものに変更された。[31)] しかし，これでも会員数の問題等から会の財政的脆弱性は否めなかった。この財政的基盤の脆弱性が朝鮮体協の第二の特徴であり，根本的課題であった。しかもその後，総督府の意向にしたがって内鮮融和政策のスポーツにおける推進役を担うようになっていくことになり，補助金が充てられるが，その財政的基盤は全く堅固なものではなかったのである。

一方，朝鮮体協設立以後，地方にも体育協会（以下「地方体協」と略）が組織されていく。その設立経緯の詳細は不明であるが，朝鮮体協の地方版として設立されたと考えられる。すなわち，地方における「日本人のスポーツ奨励と親睦」を目的としていたということである。そしてやがては，地方における内鮮融和政策の推進役としても活動していくことになる。[32)]

1920 年から 31 年までの地方体協組織に関して 1932 年の文部省『殖民地ニ於ケル體育運動團體ニ關スル調査』及び京城日報の協会設置に関連する記事から，この時期には全道で 80 以上の日本人のための地方体協があったことがわかる。そして地方体協は，20 年代中頃までに大都市にまず組織され，30 年代初頭までにその都市を中心として道体協が作られていったことが窺える。[33)]

このような地方体協の設立経緯は，地方において朝鮮体協と同様の特徴を持っていたと見ることができ，それぞれ組織責任性と財政的脆弱性との問題を抱えていたとみることができる。また，それぞれの地方体協成立当初から朝鮮体協との連携が全く見られず，1930 年代の朝鮮体協改革期に至っていたのである。

３－２．朝鮮体協改革問題

すでに述べたように，朝鮮体協は，会の運営に当たって常に財政的問題を抱えていた。また，地方体協との関係も命令系統や会費などによる関係も明確に規定されたものではなく，大会毎に問題があったことが窺える。それを示す記事が 1932 年 9 月 18 日付京城日報に掲載されている。

それは，「体育協会の組織　ぜひ改善したい」という見出しで，総督府體育運動主事竹内一を迎えて咸興体協で座談会が行われている記事である。咸興体協側からの参加は，關藤副会長，森田，日野，松阪の各理事，中山，西本，高潮，村形，河田，原，渡邊の各幹事他数名であった。その中で前半部分では，「主客両者の挨拶よろしく歓談に入」り，咸興では朝鮮神宮青年競技に力を入れていること，グラウンドや社会体育施設と関わり学校開放や公設運動場設置課題などが話題になっており，「野球の統制などより府及び之に準ずるものは必ず公設運動場を設備すべしと訓令を出しちやどうですか」という地方の本音が披瀝されている。この後，以下のようなやりとりが続いている。

▲ 日野　矢張り朝鮮神宮競技の問題ですが，あれには朝鮮体育協会は無関係なんですね。
▲ 竹内　実務は朝鮮体育協会が取り扱っているのです。然し朝鮮体育協会も随分不徹底な組織で全鮮の道体育協会を統制する仕組みになっていません。これは追々改善して各道から代議員も出すような組織に改める必要がありますね。
▲ 日野　神宮競技も非道いですよ。今回は野球には旅費も支給せぬし二十日まで申し込まねば棄権と見なすなど随分猛烈な通牒を寄越しています。
▲ 一同　随分横暴だなあ，一体収入は何に使うのだろう。
▲ 原　朝鮮神宮の青年競技に円盤や三段跳は一般と記録も接近した今日是非加へてほしいものですね
▲ 竹内　明治神宮競技に範を垂れた結果でせうが朝鮮の実状から見てもう加へてもよい時機でせうね，努力して見ませう・・・・・。
此の間野球統制案や府民運動としてのラヂオ体操普及計画等その道の人だけに話題云々として尽くさず漸く午後七時閉会[34]（下線部，引用者）

ここには，第一に，朝鮮神宮競技大会の実務に関しては朝鮮体協が担っているが，咸興体協理事にはこれを理解していない者がいるということ，第二に，朝鮮体協と各地方道体協との組織的連携がないこと，第三に，大会経費の支出に関する地方体協の不信感が存在していること，第四に，これらのことと関わって総督府の体育主事が体協の仕組みを改革する必要性に言及していることなどが示されている。

第一の問題は，内鮮融和政策の一環としての朝鮮神宮競技大会が総督府の所管であることからきている。すなわち，総督府の所管である大会を民間団体である朝鮮体協にその運営を任せていたということであり，その関係を地方体協では理解されていなかったということである。これは，第二の問題とも関わることであるが，朝鮮体協と地方体協が組織的に連携されていないことを示すものでもある。むしろ，地方体協から見れば朝鮮体協もソウルにある体協の一つであるという認識があったのかも知れない。いずれにせよ，地方体協同士の関係や朝鮮体協と地方体協の関係はまだ確立されていなかったということである。

第三の問題は，大会経費支出と関わって地方体協の朝鮮体協への不信を示すものであるが，総督府から朝鮮体協へ，朝鮮体協から地方体協へという経費支出に関わって朝鮮体協経由の支出に対する地方体協の不信である。これは，朝鮮体協の役割に対する地方体協の認知がきわめて低いことを示している。

第四の問題は，以上の三つの問題と関わって総督府の体育主事が体協の組織改革の必要を述べているのであるが，まさにこの時期にその改革が必要であったことを示すものである。それは，民間団体として生まれてきたものを総督府の都合で管制団体に変えようとするもの

であるが，これに対して咸興体協の一員からは何ら矛盾を感じる様子は窺えず，むしろ総督府による改革が当然であるかのように窺える。これが当時の総督府と体育団体（朝鮮体協や地方体協）との関係であったといえよう。

これらは，1932 年 9 月時点における朝鮮体協と一地方体協の関係を示すものであり，総督府体育運動主事による朝鮮体協改革が俎上に上っていたことを示すものである。これが，峰岸が解職に追い込まれる 3 ヶ月前の記事であり，これが峰岸主事解職問題の背景にあったということである。

３－３．峰岸主事の解職

峰岸の主事解職は，1932 年 12 月 3 日付の京城日報の記事で確認できる。見出しは「朝鮮体協の危機　突然幹部二名解職　欠損続き赤字に悩む」とあり，次のような記事を掲載している。

> 全日本屈指の体育団体として半島体育界を指導してゐた朝鮮体育協会が財政的ピンチに立ってまさに瓦解せんとしている――朝鮮スポーツ界の統轄者朝鮮体育協会は例年明治神宮競技に次ぐ日本第二の大きな運動祭である朝鮮神宮競技その他の種々の催しを行い，近年半島運動界を内地のそれに比しても劣らないレベルに上げた有力な指導者であったが，**今年深刻な不景気**に際会して同協会が主催した**各種の競技会が不成績**に終わり，約四千円に上る**大きな赤字**を出し遂に首も廻らぬ**財政的窮迫**に喘いでいたが，このピンチに際し協会ではなんら**更正策**がたてられず，従来重大問題が起きた場合に開かれる**評議員会**もなく疑惑の眼を投げられていたところ，二日朝突如同協会峰岸主事，熊谷幹事に対して**抜き打ち的な『解職』の書留便**が届けられ，いよいよ問題は紛糾し協会側の今後処置に付注目されている。峰岸，熊谷両氏の解職は財政逼迫の責任者として責を負わしたものと推されるで，大体協会の専務は各役員が行うものであるから，それに対して単に両氏のみの引責を問うた**片跛的処置**は一般から非難されている。[35]（太字，引用者）

また，翌朝の京城日報では，「Ｓ・Ｏ・Ｓの体協　何処へ行く？　峯岸，熊谷両氏の解職から　俄然火の手は上る」として，「解消か改造存続か」が問われている。そして，その背景として「本年度事業不振に基因した赤字」と「不統制による悩み」が「本年十月挙行された朝鮮神宮競技，日芬（日本・フィンランド）対抗競技によっていよいよ表面化」し，「協会何処への疑惑の目は全国体育関係者から注視されていた」としている。そしてその処理は，「明年二月年度変りと役員改選期に何事か行われるものと一般から予想されていた」が，「俄然一日付体協主事峰岸昌太郎，同幹事熊谷薫浪両氏の無□（不明―引用者）告解職により事件は突発された形だが，この解職問題にからんで協会紛糾の火の手はいよいよ大きくなった」と報じている。さらに，体協側は，二人の解職について「非常手段をとる外なしと経費節約の理由で決行した」としているが，「少なくとも主事の要職にありまた朝鮮運動界の功労者である峰岸氏や熊谷氏を僅か書留便一本をもって誂った非常識な手段には一般から頗る疑惑の眼が投げられ体協側の行為には非難の声が浴びせられている」とし，「赤字時代に直面して非常手段に生きんとする朝鮮体育協会は一体何処へ行く」のか，そのあり方を問うている。[36]

このような措置の唐突さや一方的なやり方について，同紙は，さらに次のように報じている。

赤字暮し協会の改革犠牲とはいひ乍ら，余剰労力を持ちつつ職を離れる氏の心情には聊か同情も寄せらるるが，半島スポーツ指導者としての第一人者を，最高指導機関たる協会から失ふことは半島スポーツ界の為甚だ不幸のことであらう[37]（傍点引用者）

また，「二日朝解職の書留を受け取った時は不幸にして氏は病床に臥してゐたが，かつて養正に教鞭をとった生徒が検病の結果『腸チフス』と判り，その知らせも同時に受けとった氏の心境には痛々しきものがあったらう」[38]とあり，峰岸は「腸チフスで病臥中」であった。それゆえに，これに対する峰岸のコメントは，夫人を通じて伝えられた。それは，次のようなものであった。

解職の理由は自分にもよく解せぬが，多分日芬競技その他借金三千六百円が未だに返せぬため，つまり赤字症の犠牲だらう。かねがね自分は主事の器ではないことを知り辞意は持ってゐたが，体協逆境の際身を引くも面白からず渾身一番大立直しを行って見ようと思ってゐた際だった。然し解職するならば一応前以て然るべく話がありさうなものだが・・・[39]

以上が峰岸解職に関わる一連の記事内容である。これらの内容から峰岸は，まず 12 月 2 日付の書留によって同月 1 日付で解職されたことがわかる。そしてその解職の第一の理由は，不景気の中で各種競技会が不成績に終わり，大きな赤字を出した責任であるということであった。しかし，「両氏のみの引責を問う」のは「片跛的処置」であり，むしろ，体協役員が「更正策」も立てず，「評議員会も」開かず，「抜き打ち的な『解職の書留便』」を送るという処理したことは，「各役員」の責任逃れであり，「一般から非難されている」ということである。

また，峰岸解職の第二の理由として，「不統制」という問題が指摘されている。これについては 3 － 2 で見たように，すでに体協が全国の体育団体を統轄していないという「不統制」問題を抱えており，総督府としてはこれを統制できる団体に改革したいと考えていたのである。しかし，「朝鮮運動界の功労者」を「僅か書留便一本」で「馘った非常識」に「一般から頗る疑惑の眼」が投げられ体協側の行為には非難の声が浴びせられており，峰岸らの解職の後，体協がどこに向かうのか，どのような組織になっていくのか，その見通しに疑問が呈されていた。

このように一般にいくつかの疑念が持たれている解職問題は，峰岸自身にとっても不可解であり，自分の意志に反するものであった。この日報じた京城日報の記事は，峰岸に同情する論調で展開されているが，それは，峰岸の実績が日本人社会でも一般に認められていたからであったと見ることができる。それについて同紙は，さらに次のように報じている。

協会改造の犠牲となって主事の重職を退くことになった峰岸昌太郎氏は養正高普の教職時代からの熱心体育指導者として今日まで半島スポーツ界につくした功績は偉大なものがある。養正高普を今日マラソン王国に作りあげ，近くは日本代表として晴れのオリンピックに出場した金恩培選手を輩出するまでの氏の努力には粉骨砕身幾多の血のにじむやうな犠牲が忍ばれてゐた。金選手と共に同時に出場した權泰夏選手の指導にも氏の努力は與つて力あり，それだけ半島の若き学生やスポーツマンから慈父のやうに慕はれてゐたものである。協会に陸上競技部役員として席をおいてからは着実に仕事を進めて協会の基礎を固め，一昨年秋押されて主事の重責を負ふたのである。[40]（傍点引用者）

このように峰岸の「半島スポーツ界につくした功績は偉大なもの」であり，そこには峰岸の「血のにじむような犠牲が忍ばれてゐた」のである。しかし峰岸のこのような努力もむなしく，「協会改造の犠牲」として「解職」されたということである。

その組織改革は，直ちに行われている。すなわち，「体協自体の清算は近く当局者が案を練って役員会にかけること」[41] になるのである。峰岸らの解職問題は，総督府によって組織体力以上の運営を強いられてきた朝鮮体協が，自らの自立性を確保する方向で組織を立て直すのではなく，その自立性を放棄する形で対応した結果であったと見ることができる。つまり体協幹部の対応は，「極度の消極政策」であり，「体協自体の清算」という方向に向かうことになるのである。

しかし，このような「体協の本府（総督府―引用者）移管説」に対して「実際運用上に民間の諸団体が牽制され面白からざるものあり，有識者中に反対論を称へるものが多く，民間の銀行会社団を背景とした相当経費に融通性と弾力のある団体とし，単に運動諸団体の統制者として従来の如き興行式な催しには手を出さず，真のスポーツ指導団体として確実な歩みを続けて行くことを待望されてゐる」という「スポーツの自立」，「体力に見合った活動」によって体協を再編していこうという有識者の反対論が存在した。[42] それは，組織論的にも財政論的にも朝鮮体協がもっていた問題性を解決しようとする姿勢が見られ，傾聴に値するものであった。

ところが，このようなスポーツの側の論理は実を結ばず，当局によって体協統制案が提起され，京電という民間企業内にあった体協事務所は総督府内に置かれるようになる。朝鮮体協は，まさに官制団体として再編されていくのである。

1930 年代初頭の体協改革の課題は，体協そのものが持つ脆弱な財政的基盤から来る問題と総督府学務局が求めていたスポーツの統括団体としての体協への要請が背景として存在したのである。峰岸の解職は，前者を口実にしたものであり，後者の要請に唯々諾々で応じた体協の姿勢の犠牲であったといえよう。

４．体協解職後の峰岸と今後の課題

体協解職後，峰岸は満州に渡ったという。そのことについて報じたのは，1933 年 1 月 21 日付東亜日報であった。その記事の訳文は，以下の通りである。

> **競技界の恩人　峯岸氏満州へ　新京に職を求めて**
>
> 朝鮮陸上競技界の恩人であり，また今日オリンピック選手を出した養正高普陸上競技部の陸上の王者を育てた前朝鮮体協主事峯岸昌太郎氏は事情に依り体協を辞し，これまで病気で順化院に入院治療中であったが，過日退院して来る二十三，四日頃に満州新京に向かって出発する予定だと言う。そこでもまた，陸上競技指導方面で活動する筈だというが，氏のような十年来の朝鮮陸上競技界恩人を失うことになることを各方面に哀惜の念をかきたてていると言う[43]

このように峰岸について最後まで伝えたのは東亜日報であった。しかし，それにしても，解職から僅か 1 ヶ月あまりで退院し，直ちに満州に向かった峰岸の無念さが感じられる。

なぜ満州であったのか，その理由は今後検討すべき課題である。東亜日報が伝えるように陸上競技界での指導が期待されたのかも知れない。これまで満州教育関係資料や人物情報等を確認しているが，峰岸の満州での活動を示す資料は見られない。

また，峰岸が本当に満州に行ったのかどうかという問題もある。これについては，戦後満州から引き上げてきたという証言がある。[44] 峰岸が満州でどのような活動を行ったのかを明らかにすることももう一つの課題である。

5．朝鮮における峰岸昌太郎の思想と行動～まとめにかえて

峰岸の朝鮮における活動は，わずか 10 年余りという短い期間であった。しかし，その足跡は，その期間の何倍にも大きいものであったといえる。とりわけ，朝鮮人にとって峰岸は，スポーツの慈父であり，マラソンオリンピック選手を育てた偉大な指導者であった。このような活動を支えた峰岸の思想とはどのようなものであったのであろうか。

植民地期の朝鮮人のスポーツ活動は，併合前の学校体育での兵式体操や社会における体育団体による救国運動を担う体育訓練などの思想的系譜を背景としており，純粋なスポーツ活動であったとしても，日本人との対抗戦ではナショナリズムが色濃くなる場面が少なくなかった。それゆえに，1910 年代の武断政治期は，体育・スポーツ活動においては，試合が中止されたり，団体の結成が禁止されたりした。

峰岸が養正高普に赴任した 1921 年は，いわゆる「文化政治」期であり，内鮮融和政策が展開される時期であった。そこでは「一視同仁」が叫ばれ，日本人も朝鮮人も平等であることが建前とされていた。峰岸が養正での教育実践や体協でのスポーツ活動において朝鮮人を差別せず指導したことは，このような政策を忠実に実践したということになる。

一方，前稿で見たように 1920 年代から 30 年代にかけての朝鮮では，同盟休校が「流行」し，養正高普でも 1928 年に大規模な同盟休校が起きている。この時の陸上部員の行動と峰岸の立場は，盟休に対する姿勢を推察させるものである。すなわち，この盟休中，学校側は対外活動をすべて中止する措置を執った。これに対して陸上競技部員は大会参加を求める上申書を学校側に提出し参加した。この時陸上部員は顧問である峰岸の了解をもらっているはずである。これを峰岸が承認したかどうかを示す明確な資料は見いだせなかったが，結果として峰岸はその参加を認めたことになる。民族運動としての側面を強くもつ盟休事件に対するこのような行動は，結果的に見れば，それに同調的ではなかったと見ることができる。

また，陸上部の卒業生の進路を見ると総督府や龍山鉄道などの支配機構に就職したり，早稲田大学や京城医専，京城大予科などに進学したりしており，植民地支配の中で優位な立場が選択されていることも前稿で指摘したところである。この中で早稲田大学に進学したのは，1929 年度陸上競技部の主将であり，1945 年の解放後も経済界で活躍した鄭商熙であった。これらの進路に峰岸がどのように関わっていたかは不明であるが，総督府には三人，龍山鉄道には一人の卒業生が含まれており，全く無関係であったとは考えにくい。

この範囲で見る限り峰岸の思想と行動は，植民地支配を決して逸脱するようなものではなかったのではないか，むしろ内鮮融和政策に忠実であったのではないかと考えられる。にもかかわらず，峰岸は，なぜ養正高普を辞め，朝鮮体育協会陸上部監督になり，さらに主事になったのであろうか。その理由を示す明確な資料は存在しなかった。しかし，高普退職の経

緯やその後の異動を見るとき，なぜ朝鮮人の高普から日本人のための団体である朝鮮体協に異動したのかが問われる。それは，高普での朝鮮人学生に対する指導を止めさせることにあったのではないかということである。しかし，峰岸は，体協陸上部監督・主事になって以降も，ロサンゼルスオリンピックに向けて金恩培，權泰夏選手の指導を行っていた。しかしまたこれは，オリンピックという国際舞台での日本の実力を示すという効果が期待されたからであり，その範囲で許されたのかもしれない。その結果次第でその評価は一転する側面を持っていた。オリンピックの結果を伝えた京城日報は，「マラソンは期待はずれ」とし，これに対する峰岸の談話を掲載しなかった。その一方で東亜日報は，金恩培の 6 位入賞を称え，峰岸の喜びの談話を掲載していた。ここに二つの新聞の峰岸に対する評価が現れているといえよう。前者は総督府の機関誌であり，当局者の姿勢を強く反映したものである。後者はまさに朝鮮人の認識を示すものである。

峰岸は，体協赤字の責任をとらされ，総督府の統制下に置かれることになった体協改組の犠牲となった。この改組に峰岸は，必要とはされなかったということである。

思想的には内鮮融和の実践者であったと思われる峰岸は，なぜ朝鮮を去らなければならなかったのであろうか。そこには，理念と現実とのずれがあったのではないかと考えられる。朝鮮人を差別しないという理念を標榜して内鮮融和政策が展開されたが，現実的には厳然として差別は存在したし，20 年代から 30 年代にかけては朝鮮における労農運動や学生運動がピークに達する時期であった。それゆえに，そのずれの増幅は，単にスポーツにおける勝利や達成にそれ以上の社会的民族的効果をもたらし，植民地支配秩序を逸脱する可能性を生み出すこともあった。1936 年のベルリンオリンピックマラソンで孫基禎選手が優勝したことに伴って起きた「日章旗抹消事件」[45] はその典型であった。峰岸の活動は，そのような可能性をもっていたのではないかということである。

朝鮮における峰岸昌太郎の思想と行動は，養正高普時代も朝鮮体協時代も変わりなく，朝鮮人を差別せず，朝鮮人に慕われたものであったといえる。それは，決して植民地支配を逸脱するものではなかったと考えられる。しかし，それに対して朝鮮体協，朝鮮総督府がとった措置は，けっして峰岸の偉業をたたえるものではなかったといえよう。朝鮮における峰岸の活動は，植民地支配の現実に翻弄され，その偉業に反する悲惨なものであったといえよう。

注

1) 拙稿　養正高等普通学校体育教師峰岸昌太郎について　北海道大学大学院教育学研究院紀要　第104号　2008年　169-185頁

2) 鎌田忠良　日章旗とマラソン　潮出版社　1984　399頁

3) 京城日報1931年６月18日夕刊３面「国際競技に参加せる朝鮮選手の活躍（一）選手監督峯岸昌太郎」，同1931年６月19日夕刊３面「同（二）」，同1931年６月20日夕刊３面「同（三）」という連載記事に体協陸上部監督として執筆している。その活動については，「協会に陸上競技部役員として席をおいてからは着実に仕事を進めて協会の基礎を固め」（京城日報　1932年12月３日付　朝刊７面）と評価されているが，実際の活動内容は不明である。なお，「峰岸」の表示については，新聞紙上では「峰岸」と「峯岸」が使われているが，戸籍上では「峰岸」である。新聞等の引用では表示のままとし，本文では戸籍上の表示を用いている。

4) 李丙權　養正體育史　養友體育會　52頁　1983。同書の写真のキャプションには，優勝年をそれぞれ1928，1929年と書いている。これはその年度を示したもので，実際の大会はその年度の1月に開催されている。そこで本稿では，それぞれ1929年1月と1930年1月とした。

5) 今回の調査は，2008年9月の韓国養正高等学校理事厳圭白先生との面談から始まった。厳圭白先生からは貴重な資料・情報を提供していただいた。特に，同窓会名簿から孫基禎氏のご子息孫正寅氏を紹介いただいたことが，これまで不明であった事実を解明することに大いに役立った。同年11月に孫正寅氏と面談することができた。孫正寅氏からも，多くの示唆と情報を提供していただいた。その中に御尊父孫基禎氏の手帳にあった峰岸のご子息の電話番号を教えていただいた。これにより峰岸家と連絡が取れ，2009年1月峰岸昌太郎の次男の家で次男の長女にインタビューをすることができ，写真や手紙等の写しを頂いた。これらの方々に心より感謝を申し上げたい。

6) 赴任については，峰岸の妻好の執筆年不明で９月17日付の伯父寅太郎宛の手紙による。この手紙の中で「主人と郡立高等女学校に務めております」とある。同手紙には，「国にまいりまして三年の秋となりました」とあり，この時「長男五才次男三才」の記述がある。国は「国分」と考えられ，次男は「大正６年４月28日」生まれであることを確認している。当時は年齢を数え年で数えるので，この手紙が出されたのは大正８年９月と考えられる。仮に次男の年を満で数えるとこの手紙が出された年月は大正９年９月になるが，妻好は大正9年３月21日に亡くなっているので，大正９年９月に手紙を出すことはできない。したがってこの手紙が出された年は大正８年９月であると見るのが妥当であると考えられる。また，その３年前の大正６年日本体育会体操学校卒業後，峰岸は鹿児島県姶良郡立実科女学校に赴任したと考えられる。同校赴任の事実については，同校の後身である鹿児島県立国分高等学校現教頭岩本慎一氏より，①峰岸昌太郎先生は在職されておりました。（名簿に逝去者として登録されております。）　②80周年記念誌に卒業生が「体育の峰岸先生にあだ名をつけられた」という記載がありましたが，それ以外は出てきていませんでした，という連絡を頂いた。同氏に赴任年月日を確認したが，不明とのことであった。同氏よりお送り頂いた80周年記念誌のコピーには，郡立３回大正12年第８回卒秋元しずえ氏の「思い出」が掲載されており，学芸会で「舌切り雀」のおばあさん役をしたことから「ばあさん」というあだ名をつけられたことを懐かしく語られている。

7) 前掲　日章旗とマラソン　100頁

8) 例えば，李學來は，自転車競技で，当時自転車王として崇拝され，植民地の民族的英雄として熱狂的な声援を送られていた厳福童が，圧倒的な強さで予選を勝ち抜いていた時，日本人主催者は，彼を「先生として待遇」し「決勝戦に参加させ」なかったことや，同じく自転車競技で，選手資格を制限して，これまで選手として出場したことのない者しか出場できないようにしたりしたことを明

らかにしている。（李學來　韓國近代體育史研究　知識産業社　1990　103～104頁）

9) 李學來　韓國近代體育史研究　知識産業社　1990　105頁

10) 鄭光植　日本植民地朝鮮における民族派スポーツ統括団体「朝鮮体育会」に関する研究　体育史研究　第25号　13頁　2008。しかし，初代の会長の張斗鉉，理事長の高元勲，理事の李升雨，鄭大鉉，評議員の金性洙，申羽均，金東轍などは，民族問題研究所編『親日人名辞典』1～3巻（㈱ミンヨン 2009）に含まれている。同事典によれば，以下の二名は朝鮮体育会設立時において親日的であったことが窺える。一人は，**高元勲**（コ・ウォンフン）である。彼は，中枢院参議・道知事・国民総力朝鮮連盟理事などの活動から親日派とされている。併合前は日本留学し明治大学法科を卒業，帰国後普成専門学校講師になった。併合後，1911年8月に総督府警務総監部警部として庶務課文書係として勤めた。1913年4月再び普成専門学校教授になっており，総督府の警部をしながら教師として勤めていたことになる。1915年11月大正天皇即位記念大礼記念章を受けており，式典に参加したか行事に関係したことになる。1916年2月警察を辞めて以後，普成法律商業学校学監，徽文高等普通学校講師嘱託，普成法律商業学校校長というのが，朝鮮体育会理事長就任前の経歴である。このように併合前は明確ではないが，併合後は親日的であったことが窺える。その後，総督府の政策に深く関与している。1924年に朝鮮総督の諮問機構の奏任官待遇の中枢院参議に任命されて以後，全羅北道知事，京城府志願兵後援会理事，国民精神総動員朝鮮連盟理事，国民総力朝鮮連盟理事など積極的に親日活動を展開した。もう一人は，**申羽均**（シン・ウキュン）である。彼については，併合前から軍人で日本軍への功労で日本政府から勲４等瑞宝章を受けている。合併後も変わらず，反日運動に対抗するために日鮮融和を掲げて結成された同民会が創立される時，評議員を引き受けて，死亡するまで活動した。

一方，朝鮮体育会設立時は親日的ではなかったと見られる者が三名いるが，これらの人物も20年代から30年代以降に親日的活動を行っていたとされている。まず，**張斗鉉**（チャン・トゥヒョン）は，同民会評議員，時中会評議員として親日派とされている。これらは1924年以降の活動である。1912年韓国併合記念章を受けているが，併合当時官吏であったものには授与されているので，この時点で親日派であったかどうかは明確ではない。彼は，併合前京城醸造合名会社重役を務めながら官職に就いていたが，合併後官職を離れて実業界で従事した。したがって1920年6月朝鮮体育会発起人として参加して，7月に会長に選出される時期には親日的であったかは明確ではないといえる。しかし1924年4月申羽均とともに同民会評議員として参加したことや，1934年11月朝鮮の独立放棄と朝鮮人自治を標ぼうして組織された時中会に参加して評議員として活動したことに親日的活動が明確に示されている。**鄭大鉉**（チョン・テヒョン）は，朝鮮体育会理事を引き受ける前は，学校長を務めていた。理事就任後は，天道教道師，朝鮮民立大学期成準備会に発起人などを勤めた。1928年昭和天皇即位記念大礼記念章受章，1934年朝鮮総督府の諮問機構である中枢院の奏任官待遇参議に任命されて以降，親日的活動が明確に示されている。**金性洙**（キム・ソンス）は，朝鮮体育会役員就任前は中央学校校長・東亜日報社長を歴任しており，この時点で親日的であったかは明確ではない。しかし，1935年11月京畿道庁の主導で「京畿道内の思想善導と思想犯の転向指導保護」を目的に組織された昭道会の理事に選任されて以降は，明確に親日的活動を行っていた。

なお，**李升雨**（イ・スンウ）は，同事典には朝鮮体育会との関係が明示されていない。同事典にある同名の人物は，朝鮮体育会設立時以前には京城で弁護士として活動しており，1920年代から30年代にかけて民族運動家の弁護活動も行っていた。しかし，1936年6月朝鮮総督の諮問機構の中枢院の奏任官待遇参議を引き受けて以降は明確に親日的であったことが窺える。また，**金東轍**（キム・ドンチョル）については，同事典に詳しい経歴は記されていない。

11) 詳細は，拙著『日本植民地下朝鮮における学校体育政策』，明石書店，2003年，289-290頁を参照のこと。

12) 甲子園大会の出場については，1915年に同大会が開催されることが決まった時点で，朝鮮からの

出場希望が出されていた。（朝日新聞社　野球年鑑　大正五年　復刻版　運動年鑑１　272頁　1984）しかしこの時は，出場を許可しなかった経緯がある。（前掲　日章旗とマラソン　100頁）また，21年以降出場できるようになったが，朝鮮での予選大会は，日本人の予選と朝鮮人の予選が別々に行われ，朝鮮人の予選で優勝した学校が日本人の予選大会に出場するという形で行われ，形式的にも「平等」な参加とはいえるものではなかった。

13) 前掲　日章旗とマラソン　406～407頁

14) 同前　430～431頁

15) 同前　96頁

16) 羅絢成　韓國體育史　文泉社　ソウル　1963　184頁。「三角山」は，現ソウル特別市と京畿道高陽市境界にある「北漢山」の別名である。昔から負児嶽・華山・漢山といい，主峰の白雲台を中心に北側に仁寿峰（811m），南側に万景台（800m）の3峰が三角形に置かれていて，三角山という。当時の朝鮮の象徴の一つであった。

17) 同前　184頁

18) 朝鮮思想通信社　朝鮮思想通信　1927年５月２日　４頁

19) 京城日報　1931年９月８日付　夕刊２面。見出しも本文も「峰岸」となっている。

20) 京城日報　1932年６月２日付　朝刊７面。見出しでは「峯岸」であるが，本文では「峰岸」となっている。

21) 東亜日報　1932年８月９日付　２面。原文は以下の通りである。

朝鮮運動史上　特書할栄誉　등수로　따질　수　업는　일

◇恩師峯岸氏感想

김은배（金恩培）군을　길러낸 그뒤에　숨은 큰　지도자　지금엔　조선체육협회주사（朝鮮體育協會主事）　봉안창태랑（峯岸昌太郎）씨는　말하되

인제는　즉어도　원이업슬만치　그저　깃븜니．이런　선수를　조선에서　조선사람으로　길러내게된　것은　조선채육게를　위하야 또　장래를　위하아 큰　『쎈세이슈』을　이르킨　점에서 김군의　활약은　실로　감격할　뿐이외다．　나라로　十八개국　지지안흐라는　二十八명의　로장숙장들에 끼어　생후　처음　길　처음　국제무대에서　당당히　싸워 나라　수로　十五국　二十二선수를　자긔미트로　떨어드린　것만으로　나는　우승에　못하지　안는깃븜에　날뛰입니다 ……운운


運動史上
特書할榮譽
등수로 따질수 업는 일
◇恩師峯岸氏感想
김은배(金恩培)군을 길러낸 그뒤에숨은 큰지도자 지금엔조선체육협회의 주사(朝鮮體育協會主事) 봉안창태랑(峯岸昌太郎) 씨는 말하되
인제는 즉어도 원이업슬만치 그저 깃븜니다 이런선수를조선에서 조선사람으로 길러내게된것은 조선체육게를 위하야 또장래를위하아 큰 『쎈세이슈』을 이르킨점에서 김군의 활약은 실로 감격할 뿐이외다 나라로 十八개국 지지안흐라는 二十八명의 로장숙장들에 끼어 생후처음 길 처음 국제무대에서 당당히 싸워 나라수로 十五국 二十二선수를 자긔미트로 떨어드린 것만으로 나는 우승에 못하지 안는깃븜에 날뛰입니다……운운

22) 京城日報　1932年５月31日付　朝刊７面。この中で「半島競技界からはじめて一国を代表して全世界最高の晴れの舞台に出場半島運動史上に特筆大書すべき好記録であり，しかもわが国選手の優勝が最も有力視されてゐるマラソンに二人揃って選ばれて行くことは在住民の喜びとするところである。」と記され，両人の略歴が示されている。養正高普五年生の金恩倍については，この少年選手が「空高く日章旗を掲げることを予想すれば今から心躍るものがある」と金恩培の優勝により「日章旗」が揚がることへの期待の強さが窺われる。

23) 京城日報　1932年８月９日付　夕刊２面

24) 同前

25) 京城日報　1932年９月15日付　夕刊２面

26) 京城日報　1932年９月15日付　朝刊７面

27) 拙著　日本植民地下朝鮮における学校体育政策　明石書店　2003年　282-288頁

28) 大島勝太郎　朝鮮野球史　京城　朝鮮野球史発行所　1932　127頁

29) 前掲　拙著　284頁

30) 朝鮮新聞　1919年３月16日　２面

31) 京城日報　1925年３月９日　夕刊２面

32) 前掲　拙著　290頁

33) 前掲　拙著　286-287頁。なお，全羅南道と咸鏡北道以外の道協会の設立年月は，次の通りである。咸鏡南道1925年４月，平安南道1926年10月，慶尚南道1926年９月，慶尚北道1926年11月，平安北道1927年６月，黄海道1927年６月，江原道1927年９月，忠清南道1928年９月，忠清北道1929年６月，全羅北道1929年８月。

34) 京城日報　1932年９月18日　朝刊５面

35) 同前

36) 京城日報　1932年12月３日付　朝刊７面

37) 同前

38) 同前

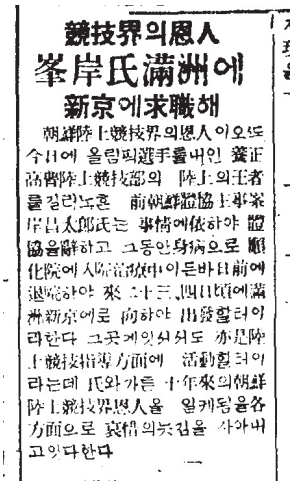
39) 同前

40) 同前

41) 京城日報　1932年12月３日　朝刊７面

42) 京城日報　1932年12月３日付　夕刊２面

43) 東亜日報　1933年１月21日　２面。原文は以下の通りである。



競技界의恩人
峯岸氏滿洲에
新京에求職해
朝鮮陸上競技界의恩人이오또
今日에 올림픽選手를내인 養正
高普陸上競技部의 陸上의王者
를길러노흔 前朝鮮體協主事峯
岸昌太郎氏는 事情에依하야 體
協을辭하고 그동안身病으로 順
化院에 入院治療中이든바日前에
退院하야 來 二十三,四日頃에滿
洲新京에로 向하야 出發할터이
라한다 그곳에잇서서도 亦是陸
上競技指導方面에 活動할터이
라는데 氏와가튼 十年來의朝鮮
陸上競技界恩人을 일케됨을各
方面으로 哀惜의늣김을 자아내
고잇다한다

競技界의恩人
峯岸氏滿州에
新京에求職해

朝鮮陸上競技界의　恩人　이오　또今日에　올림選手를　내인　養正高普　陸上競技部의　陸上의王者를　길러노흔　前朝鮮體協　主事　峯岸昌太郎氏는　事情에　依하야　體協을　辭하고　그동안　身病으로　順化院에　入院治療　中이든바　日前에　退院하야　來二十三,　四日頃에　滿州新京에로　向하야　出発할　터이라한다。　그곳에　잇서서도　亦是　陸上競技指導方面에　活動할　터이라는데　氏와　가튼　十年來의　朝鮮陸上競技界恩人을　일케됨을　各方面으로　哀惜의　늣김을　자아내고　잇다 한다

44) 2009年1月に峰岸家でインタビューを行い，峰岸昌太郎の次男の長女より聴取した。

45) 「日章旗抹消事件」とは，東亜日報，朝鮮中央日報などの新聞社が1936年にベルリンオリンピックマラソンで優勝した孫基禎（ソン・キジョン）選手の写真にあった胸の日章旗を削って報道した事件である。ベルリンから送られてきた孫基禎選手の写真には「日の丸」がついていた。東亜日報などは支配の象徴である「日の丸」を削って発刊した。これは，朝鮮民族の自尊心を示そうとしたものであった。これに対して総督府は，中央日報を自主休刊に追い込む一方，東亜日報を長期停刊処分にし，関係者を投獄拷刑に処した。事件後，朝鮮におけるスポーツは総督府のより強固な統制下に置かれ，1938年7月には朝鮮体育会が解散させられる。